

【報告】

小児がん患児のきょうだいへの母親のかかわり —グループインタビューを用いた母親への介入—

橋本美亜*¹ 藤田あけみ*¹

(2019年3月19日受付, 2019年4月26日受理)

要旨: 目的: 小児がん患児の母親の思いを共有する場の提供や共有する場における看護介入が, 有効な看護支援となり得るかを検証することである。

方法: 小児がんのために長期入院中の患児の母親のうち, 患児以外のきょうだいがいる母親5人に, 研究者がファシリテーターとして介入するグループインタビューを行い, 1ヵ月後に個別インタビューを実施した。得られたデータを質的帰納的に分析した。

結果: グループインタビューによって得られた母親のきょうだいへのかかわりとして【家庭環境の調整】【母親と父親の役割の調整】【家族以外にきょうだいのことを依頼する】【きょうだいの状況の確認】【きょうだいとの時間の確保】【きょうだいに我慢をさせ充分かかわれていない】の6カテゴリーが生成された。母親がグループインタビューを経て今後実施したいこととして, 「父親と交代」「1日1回母親から連絡をする」「周りの人に伝えて理解してもらう」の3つがあげられた。これらを実施したことのきょうだいの反応としては, きょうだいの気持ちの表出や, 両親の気分転換など, 家族の良い反応が得られた。結論: 小児がん患児の長期入院により, きょうだいと母子分離状態にある母親が思いを共有できる場を設け, 看護師がファシリテーターとして介入することは, 母親やきょうだいへの看護支援として有用であることが示唆された。

キーワード: 小児がん, きょうだい, 母親

I. はじめに

小児がんの治療は長期間の治療を要し, 治療中の患児は長期入院が必要となることが多い。さらに, 専門性の高い小児がんの治療が可能な病院は限られており, 地域によっては病院と自宅が遠距離になることがある。病院の方針にもよるが, 多くの場合, 母親は患児が乳幼児期であれば付き添い¹⁾, 付き添いを必要としない年齢であっても, ほぼ毎日面会に訪れるなど生活スタイルの変化が必要になる。さらに自宅が遠方であれば, 母親のみが病院近くに住居を借りて通院するなど, 家族の分離を余儀なくされる。

小児がん患児にきょうだいがいる場合, きょうだいは患児に付き添った母親と長期間会えないことがある。そのことが小児期のきょうだいにとってはストレスとなり, 患児の入院中や退院後に体調不良や不登校などの問題が生じる例もある²⁾。子どもにとっての母親の存在は, 乳児期, 学童期, 思春期によって意味や比重は変化するが, 母親が患児に必要なと同様にきょうだいにも重要な存在である。

患児のきょうだいへの心理的・社会的サポートが必要であることは認識されており^{3,4)}, 問題を抱えたきょうだいへの介入研究⁵⁾が行われている。また, 積極的にきょうだいとの関わりを持ち, きょうだい支援をシステム化し取り組んでいる病院⁶⁾もある。一方, 患児に付き添っている母親

についても, 自宅に残した子への思いと患児への思いとの厳しい葛藤状態におかされていることがわかっている⁷⁾。母親は家に残した子どもへの申し訳ないという気持ちを抱きつつ, 病気の子どもに付き添い, ストレスを抱えており, 母親に対する支援が必要であると考えられる。

筆者らは, 小児がん患児の母親ときょうだいの思いから, きょうだいへの母親のかかわり方法について検討した。結果, 入院中の同じ疾患の子どもの母親同士で, 複雑な思いを共有することで, 母親は患児のきょうだいへのかかわりの手段を考えやすくなること, 母親が情報共有する場に看護師がファシリテーターとして介入することが, きょうだいへの支援に繋がることを示唆された⁸⁾。そこで, 小児がん患児のきょうだいへの母親のかかわりを検討する研究の継続として, 母親の思いを共有する場の提供や共有する場における看護師の介入が, 有効であるのかを検討したいと考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は, 小児がん患児の母親の思いを共有する場の提供や共有する場における看護介入が, 有効な看護支援となり得るかを検証することである。

III. 方法

1. 対象者

A 県内の総合病院に小児がんの検査・治療のため長期入院中の患児の母親のうち, 患児以外のきょうだいがいる母親5人を対象とした。

*1 弘前大学大学院保健学研究科
Hirotsaki University Graduate School of Health Sciences
〒036-8564 青森県弘前市本町 66-1 TEL:0172-33-5111
66-1, Honcho, Hirotsaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan
Correspondence Author: hashimia@hirotsaki-u.ac.jp

対象者の選定は、初めに条件に合う対象者を小児科病棟師長に選定してもらった。病棟師長から口頭で対象者に本研究の大まかな趣旨を説明してもらい、了承を得られた患児の母親とした。

2. 調査期間

調査期間は平成 29 年 4 月～6 月であった。

3. データ収集方法

グループインタビューと 1 か月後に個別インタビューを行った。

(1) グループインタビュー

グループインタビューは、グループダイナミクスが生じ、お互いのやりとりのなかで、自分自身でも気付かなかった点が見えてきたり、解決の方法を新たに見出し、潜在的な意見まで引き出すことができる。また、他のメンバーの意見に相づちを打ったり、追加で意見を述べたりするなど、個別面接法よりも楽な気持ちで参加できる利点がある⁹⁾。本研究において、母親同士の複雑な思いを引き出し、共有するための方法として適していると考えた。しかし、集団で話しをする場合、所属集団のメンバーから承認を受ける、もしくは排斥されないように努力する¹⁰⁾ことが重要であり、母親だけの場では他の母親の反応を気にして、自分の思いを表出できない可能性もあると考えられた。そこで研究者（看護師）がファシリテーターとして、母親の思いを引き出すよう介入した。

インタビューの内容は、①入院期間や付添いの有無、きょうだいの状況等の現状、②母親が実施しているきょうだいへのかかわり、③どのような支援が必要だと思うか、④きょうだいへのかかわりとしてこれから行いたいことであり、インタビューガイドに沿って実施したが、自由に語ってもらうことを基本とした。インタビューは、プライバシーの確保できる個室で 90 分程度行った。語られた内容は、対象者の許可を得て IC レコーダーに録音した。また、発言内容については逐語録に起こしたものを後日、対象者へ確認してもらった。

(2) グループインタビューでの看護師の介入

研究者（看護師）がファシリテーターとして同席し、主にインタビュー④きょうだいへのかかわりとしてこれから行いたいことについて、母親それぞれの気持ちを表出させ、情報を共有し、きょうだいへのかかわりとして必要だと思うことを引き出すよう関わった。

(3) 個別インタビュー

グループインタビューの結果と、集団の中では発言できなかった内容はなかったかを確認するために個別インタビューを行った。インタビュー内容は、①自宅にいるきょうだいへのかかわりの内容と実施内容、②きょうだいの反応についてとした。グループインタビュー同様に、許可を得て IC レコーダーに録音し、発言内容を後日確認してもらった。

4. 分析方法

グループインタビューで得られたデータは、内容分析の手法¹¹⁾を用いて次の手順で行った。逐語録の内容から「母親が実施しているきょうだいへのかかわり」、「きょうだいへのかかわりに必要だと思う支援」に関連する記述を意味内容を損なわないように注意しながらコード化した。コードの類似性、相違性を検討しながらサブカテゴリーを生成した。さらに、複数のサブカテゴリーの関係を検討しながら抽象度をあげカテゴリーを生成した。分析過程では、研究者間で内容の検討を何度も行い、複数の質的研究の経験者よりスーパーバイズを受け、修正や再検討を行い妥当性の確保に努めた。

個別インタビューでは、対象者の語りの中からグループインタビューで対象者が語っていた「今後実施したいこと」に焦点をあててデータを抽出した。

母親の思いや実施状況から、思いを共有する場の提供や共有する場における看護介入について検討した。

5. 倫理的配慮

調査施設の医学倫理委員会の審査を受け承認を得て行った（整理番号：2015-032）。病棟師長から本研究の大まかな趣旨を説明してもらい、了承を得られた患児の母親に対し、研究者が文書及び口頭で研究の主旨、実施方法、個人情報保護、研究への参加の自由と撤回の自由、不利益の回避、結果の公表について説明を行い、書面で同意を得た。母親の面接日時は対象者と相談の上、設定し、小児科病棟内のプライバシーの確保できる個室で実施した。

IV. 結果

1. 対象者の概要

対象者の概要を表 1 に示した。きょうだいの年齢は 8 歳から 18 歳で、小学生が 2 人、中学生が 2 人、高校生が 3 人であった。小学生のきょうだいのうち 1 人は生活の拠点を母親の実家に変更しており、母方の祖父母、伯父、伯母、従兄弟と暮らしていた。父親は仕事の状況に応じて、きょうだいを迎えに行くという生活であり、きょうだいは母親にも父親にも会えない日がある状況であった。もう 1 人の小学生のきょうだいは患児の 1 回目の入院時は母の実家へ生活拠点を変更していたが、2 回目の入院時から自宅へ父親と生活していた。その他のきょうだいは中学生以上ということもあり、生活拠点は変更せずに、自宅で父親と生活していた。母親は全員が病室に泊り込みで患児に付き添っていた。患児の年齢は 5 歳～12 歳であった。

2. 母親が実施しているきょうだいへのかかわり

グループインタビューの結果、表 2 に示すように 14 サブカテゴリー、6 カテゴリー、が生成された。以下、きょうだいへのかかわりについて、6 カテゴリーの内容について述べる。カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、コードは〔 〕で示した。

表1 対象者の概要

対象者	きょうだいの年齢	きょうだいの過ごしている環境	患児の年齢	調査時の入院期間	入院回数
A	兄：8歳(小学校2年生)	母の実家 *祖父母、伯父伯母従兄弟と同居	5歳	1ヶ月	2回目
B	兄：18歳(高校2年生) 姉：15歳(中学3年生)	自宅 *父親と生活	12歳	3ヶ月	2回目
C	姉：9歳(小学校4年生)	自宅 *父親と生活(1回目は母の実家)	9歳	1ヶ月	2回目
D	姉：16歳(高校1年生) 兄：13歳(中学校1年生)	自宅 *父親と生活	9歳	1ヶ月	5回目
E	兄：17歳(高校2年生)	自宅 *父親と生活	9歳	9ヶ月	1回目

表2 母親が実施していたきょうだいへのかかわり(グループインタビュー)

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
家庭環境の調整	きょうだいの生活の拠点を変更	きょうだいを母親の実家に預けていた きょうだいを母親の実家に預け、学校も転校した
	家族の生活スタイルの変更	父親が夜勤を減らし、きょうだいが夜一人にならないようにした
	母親と父親の役割の調整	母親は病院にいて、家のことは父親にまかせていた 父親が主になってきょうだいの面倒を見ていた 女の子は父親に言わずに母親にメールすることが多いようだ 母親じゃないときょうだいの気持ちを引き出せない
家族以外にきょうだいのことを依頼する	付き添いの交代が困難	思春期の女の子である患児の付き添いは父親だと困難 付き添いの交代をしたくても、父親にも役割があり、できない
	祖父母に依頼する	祖父母にきょうだいの様子を見にってもらった 祖父母と母親・父親とのきょうだいへの対応に温度差があり、サポートを受けられない
	きょうだいの学校の先生に依頼する	きょうだいのことについて学校の先生と連携がとれた きょうだいの学校の先生に依頼して、父親が帰宅するまでの居場所を作ってもらった 学年が上がると学校の先生へ頼むことは少ない
	家族以外に依頼する	きょうだいのこと(部活などの)を、他の父兄に頼むが毎回だと難しい
きょうだいの状況の確認	きょうだいと連絡をとる	きょうだいと電話した きょうだいとメールで連絡をとった
	きょうだいの様子を確認する	きょうだいに困っていることはないか訊いた 電話できょうだいの状況を訊いた
	きょうだいとの時間の確保	患児を見てもらい、きょうだいとの時間を設けた 父親に付き添いを交代してもらった 患児と一緒に外泊し、きょうだいとの時間を設けた
きょうだいに我慢させ充分にかかわれていない	きょうだいと一緒に行動する	きょうだいと一緒に買い物に行った きょうだいと一緒に何かした
	きょうだいが思いを表出できない	きょうだいが状況を理解して、自分の気持ちを抑えていた きょうだいが思いを吐き出す場所がない
	充分にかかわれていない	きょうだいのやりたい部活を、送り迎えが難しいため、諦めさせ、我慢させた 患児の体調によっては、帰れず、きょうだいに我慢させた (よくないことと思いつつも)お菓子やおもちゃでつつて、きょうだいに次に帰る時まで頑張ってもらおうようにしていた

(1) 家庭環境の調整

母親は患児の入院にあたり、「きょうだいを母親の実家に預けていた」など《きょうだいの生活の拠点を変更》したり、「父親が夜勤を減らし、きょうだいが夜一人にならないようにした」など《家族の生活スタイルの変更》をすることで【家庭環境の調整】を行っていた。

(2) 母親と父親の役割の調整

【母親と父親の役割の調整】は、「母親は病院にいて、家のことは父親にまかせていた」というように《きょうだいのことは父親が対処する》ようにしていたが、「母親じゃないときょうだいの気持ちを引き出せない」と《きょうだいにも母親が必要》であると考えていた。しかし、患児が思春期の女の子の場合など《付き添いの交代が困難》である場合もあった。

(3) 家族以外にきょうだいのことを依頼する

【家族以外にきょうだいのことを依頼する】は、父親以外の親族や親戚以外できょうだいにかかわる人に、きょうだいのことを依頼していた。きょうだいの様子を見てもらうなど《祖父母に依頼》をしていたが、「祖父母と母親・父親とのきょうだいへの対応に温度差がありサポートを受けられない」と感じている場合もあった。《きょうだいの学校の先生に依頼》し、「父親が帰宅するまでの居場所を作ってもらった」など【きょうだいのことについて学校の先生と連携がとれた】場合もあるが、きょうだいの「学年が上がると学校の先生へ頼むことは少ない」とも感じていた。部活をしているきょうだいについては、「他の父兄に頼むが毎回だと難しい」と考えていた。

(4) きょうだいの状況の確認

【きょうだいの状況の確認】は、母親は電話やメールで《きょうだいと連絡をとる》ことと、「きょうだいに困っていることはないか訊く」など、「きょうだいの様子を確認する」ことで【きょうだいの状況を確認】していた。

(5) きょうだいとの時間の確保

母親は「父親に付き添いを交代してもらった」りすることで《きょうだいとの時間を設ける》ようにし、「きょうだいと一緒に買い物に行った」など《きょうだいと一緒に行動する》など、【きょうだいとの時間の確保】していた。

(6) きょうだいに我慢させ充分かかわれていない

【きょうだいに我慢させ充分かかわれていない】は、母親が実施しているきょうだいへのかかわりというよりは、母親の内省的な思いが抽出された。母親は「きょうだいが状況を理解して、自分の気持ちを抑えていた」状態であり《きょうだいが思いを表出できない》と考えていた。「患児の体調によっては、(自宅に)帰れず、きょうだいに我慢させた」状況があり、「きょうだいのやりたい部活を、送り迎えが難しいため諦めさせ、我慢させた」り、お菓子やおもちゃなどの褒美を与えて我慢させるなど、きょうだいに《充分かかわれていない》という思いを抱えていた。

3. 母親がきょうだいへのかかわりに必要だと思う支援

グループインタビューの結果、表3に示すように8サブカテゴリ、3カテゴリが生成された。以下、きょうだいへのかかわりに必要だと思う支援の3カテゴリの内容について述べる。

表3 母親がきょうだいへのかかわりに必要だと思う支援

カテゴリ	サブカテゴリ	主なコード
家族以外のサポート	看護師に患児を依頼	患児の体調の良いときに看護師に患児を看てもらいたい 看護師に患児を預け、母親同士で思いを共有したい
	公的なサポート	公的なサポートがあれば利用したい
	医療者からの情報提供	きょうだいへのかかわりについての情報提供もあるといい
	両親がそろう時間	両親がそろってきょうだいと過ごす時間が必要 家族がそろうことが大切
家族で過ごす場所の提供	家族がそろう時間	家族がそろうことでお互いのことがわかった
	家族の力	他の誰でもなく家族がきょうだいをサポートすることが大切
	母親同士で集まる場所の提供	入院当初、不安が強く母親同士で話せる場があればよかった どうしたらよいかわからないことを知るために話せる場所があればいい 母親同士で話す場があれば参加した 話す場所が母親同士のかかわりのきっかけ
自分からかかわりをもつことは難しい	自分からかかわりをもつことは難しい	母親同士のかかわりの初めが難しい 最初は周りが見えていない

(1) 家族以外のサポート

母親は《看護師に患児を依頼》するなどの【家族以外のサポート】を必要としていた。「患児の体調の良い時に看護師

に患児を看てもらいたい」という希望をもっており、看ってもらうことできょうだいとの時間を設けたり、「看護師に患児を預け、母親同士で思いを共有したい」と考えてい

た。また入院生活を過ごす中で《公的なサポート》を求め、利用したいと考えていた。また、[きょうだいへのかかわりについての情報提供もあるといい]とも考え、《医療者からの情報提供》を求めている。

(2) 家族で過ごせる場所の提供

きょうだいにとって、母親か父親のどちらかとしか過ごせないことが負担になっていると考えており、[両親がそろってきょうだいと過ごす時間が必要]と考え、きょうだいと《両親がそろう時間》の必要性を感じていた。また両親、患児、きょうだいの《家族がそろう時間》をもつことが必要であり、[家族がそろうことでお互いのことがわかった]と考え、【家族で過ごせる場所】を必要としていた。そして、家族以外のサポートがきょうだいの寂しさを助長させることもあると感じており、[他の誰でもなく家族がサポートすることが大切]で《家族の力》が重要であると考えていた。

(3) 母親同士で集まる場所の提供

【母親同士で集まる場所】は、きょうだいへの直接的なサポートではないが、母親にとって[入院当初、不安が強

く母親同士で話せる場があればよかった]という思いがあり、入院生活や患児のことやきょうだいのことなど、[どうしたらよいかかわからないことを知るために話せる場所があればいい]と《母親同士で集まる場が必要》であると考えていた。一方で、入院当初を振り返り、[最初は周りが見えていない]とし、介入を嫌がる母親もいるだろうと考え、[母親同士のかかわりの初めが難しい]と感じ《自分からかかわりをもつことは難しい》という考えもあった。

4. 母親のきょうだいへのかかわりの実施ときょうだいの反応

グループインタビューの中で、それぞれの母親がきょうだいのために実施しようと考えた内容を確認した。そして、約1か月後に母親に個別インタビューを行い、かかわりの実施状況ときょうだいの反応を確認した。表4に概要を示した。

表4 母親のきょうだいへのかかわりの実施ときょうだいの反応

対象者	母親がきょうだいのために実施しようと考えたこと	実施したこと	実施したことに対するきょうだいの反応 (個別インタビューの結果より)
A	パパに泊まってもらう	父親と1泊で付き添いの交代をし、きょうだいとの時間を設けた一緒に遊びに出かけた	楽しそうだった 別れ際に「ママずっとこっちにいたらいいのね」と話していたが、母親が戻らなければならない状況を理解していた
B	父親と交代	父親が1泊で付き添いの交代をし、きょうだい(兄・姉)と過ごした午前は兄、午後は姉というようにそれぞれとの時間も設けた食事の時間は3人で過ごした	母親に思っていることを話し、不満に思っていることなどを表出したことで、気持ちが落ち着いているようだった
C	電話やメールに怒らないでつきあってあげる	きょうだいから来る連絡にその都度対応している。帰ったときにきょうだいと自転車ででかけた	母親と2人で出かけられて、喜んでいた
D	一日1回でも母から連絡をする	母親からメールで連絡をしてみた	きょうだいが忙しく、母親が思ったほどの反応はなかった 母親からの電話を喜んでいた
E	周りの人に伝えて理解してもらい、きょうだいとの時間を作る	祖母に母親の気持ちを伝え、きょうだいのことをお願いすることで、母親がきょうだいと話す時間を増やした	祖母の理解を得られ協力が得られるようになった きょうだいが患児に一生懸命かかわり、母親の手伝いをするなど、きょうだいの成長した様子がみられた

母親がきょうだいへ実施したいことは、父親との付き添いの交代、母親からきょうだいへの連絡をすること、周囲の人に状況を伝え協力を得ることの3つであった。

父親と付き添いを交代し、きょうだいとの時間を設けた母親からみたきょうだいは「楽しそうだった」、「母親に思っていることを話し、不満に思っていることなどを表出したことで、気持ちが落ち着いているようだった」と、きょう

だいの良い反応が見られた。同時に母親、父親の気分転換になったとも話し、殺伐としていた家族の関係が良くなったという効果もあった。しかし、年少のきょうだいでは、母親との別れ際に「ママずっといられたらいいのね」と話し、寂しい思いもさせてしまったと感じる母親がいた。

母親からきょうだいへの連絡については、年長のきょうだいであったため、部活や宿題などきょうだいが忙しく、

母親からのメールに気付いていないこともあり、母親が期待したきょうだいの反応とは異なっていた。しかし、母親からくる電話が嬉しかったと言われたとも話していた。周囲の人に状況を伝え、協力を得ることを実施した母親は、祖母にきょうだいの状況やお願いしたいことを伝え、母親自身がこれまで感じていたことも伝えたことで、協力が得られるようになったと話していた。協力が得られたことできょうだいと話す時間を増やすことができ、結果、きょうだいが患児に一生懸命かかわり、母親の手伝いをするなど、きょうだいの成長した様子がみられた。

V. 考察

1. 母親が実施しているかかわりと母親が思いを共有できる場の提供について

グループインタビューを通じて対象者(母親)は、表2、表3で示した内容を共有していた。互いに同調したり、他の対象者が実施しているきょうだいへのかかわりを聞き、「自分もそうしてみようかな」という発言が聞かれ、表4に示した内容を実施していた。きょうだいの年齢は、小学生・中学生・高校生と様々であったが、年齢によって共通するかかわり、異なるかかわりがみられた。きょうだいの年齢は異なっても、同じような境遇にある母親同士で話せる機会を設けたことで、母親の思いや実施しているきょうだいへのかかわりについて共有することができた。共有した思いやかかわりをもとに、母親が考えるきょうだいへのかかわりや必要な支援を新たに見出すことができていた。梅田ら¹²⁾の研究で母親のサポート源として情動的サポートと情緒的サポートにおいて、他患児の付き添い者があげられている。このことから母親同士で話す機会を設けることが、入院生活や家庭生活に関する情報を得る機会となる。また、西隈¹³⁾によると、基本的に人は、自己に対する不確かさを減少させようとして他者と自己を比べ、正確な自己評価を行うことによって、環境に対してより望ましい適応をはかるといわれている。母親同士で話す場を設けることで、社会的比較理論¹³⁾の下方同化的情動つまり共感的苦痛(他者の痛みや苦痛を感じ共感する)、上方同化的情動つまり共感的喜び(他者に起こった幸せを自分のことのように喜ぶ)を同時に得ていると考えられる。他患児の母親の経験やきょうだいの状況などを聴き、「そうだよ、わかる」、「大変だったね」と共感し、自分だけが大変なのではないことを確認していた。さらに、他患児の母親からきょうだいの良い変化を聴くことで、自分の子どもに対しても良い変化を期待したり、心配事が解消されたり、精神面での安心感を得る機会になったと考えられる。このように思いを共有している中で、きょうだいへのかかわりについて、他の人が実施していることを真似してみる、互いに話をする中で新しい方法を思いつくなど、新たな知見を得ることができていたと考えられ、母親同士が思いを共有で

きる場合は重要であると言える。

2. 共有する場における看護師の介入について

本研究では、母親同士で話す場所の提供を行い、研究者(看護師)がファシリテーターとしてかかわり、母親が自らきょうだいに対してどのようなかかわりができるのかを発言してもらった。母親はきょうだいへの思いを再確認し、実施できることを明確にすることができたと考える。

集団で話しをする場合、他の母親の反応を気にして、自分の思いを表出できない可能性も考えられる。対象者の中には「(母親同士が集まって話をするのを)嫌がる人もいる」と話していた。そのため、母親だけで話す機会を設けるだけでなく、看護師がファシリテーターとして介入し、母親の思いを引き出しながら、きょうだいへのかかわりに関する情報を提供することが必要であると考えられる。本研究では、グループインタビューという形で母親の思いを共有する場を提供する中で、看護師がグループインタビューの利点である相乗効果性、雪だるま性、刺激性、安心感、自発性¹⁴⁾を意識しながら介入した。その結果、母親はきょうだいへの思いやかかわりを共有し、きょうだいへのかかわりの方法を見出し実施することができていた。その思いがきょうだいにも通じており、良い変化に繋がっている。このように母親に対して介入することが間接的にきょうだいに対する介入となると考えられる。

本研究で引き出された、母親のきょうだいへの新たなかかわりを実施したことで、きょうだいや家族に良い変化が生じた家族もあり、母親の思いを共有する場の提供や共有する場における看護師の介入は、母親ときょうだいへの看護介入のひとつの方法として有用性が示唆されたと考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、対象者が5人と少なく、グループインタビューを1回しか実施していないため、本研究のデータのみでは一般化することはできないと考えられる。また、グループインタビュー後に退院した対象者もあり、2回目以降は個別インタビューを行った。今後も継続して病棟看護師と連携し、母親が定期的に母親同士で話せる機会を作れるように、環境を整え検証していく必要がある。

VII. 結論

小児がん患児の母親の思いを共有する場の提供や共有する場における看護介入が、有効な看護支援となり得るかを検証したところ、以下の結論が得られた。

1. 母親のかかわりとして【家庭環境の調整】【母親と父親の役割の調整】【家族以外にきょうだいのことを依頼する】【きょうだいの状況の確認】【きょうだいとの時間の確保】【きょうだいに我慢をさせ充分にかかわっていない】の6つのカテゴリーが得られた。
2. 母親がきょうだいへのかかわりに必要だと思う支援とし

て【家族以外のサポート】【家族で過ごせる場所】【母親同士で話す機会】の3つを求めている。

3. 母親が思いを共有できる場を設け、研究者（看護師）がファシリテーターとして介入することで、きょうだいへのかかわりについて新たな情報を得、実施できるかかわりを考えることができた。

利益相反 開示すべき利益相反はありません。

謝辞

本研究にご協力いただいた対象者の皆様と病棟スタッフの皆様へ深く感謝いたします。また本研究は弘前大学平成28年度・平成29年度子育て・介護中の研究者支援員制度の支援を得て実施しました。

なお、本研究は平成29年度弘前大学大学院保健学研究科博士前期課程学位論文の一部である。

引用文献

- 1) 竹内幸江, 内田雅代, 三澤史, 他: 小児がんの子どもと家族のケア環境. 小児がん看護, 2: 61-69, 2007.
- 2) 早川香: 小児がん患児のきょうだいの変化ときょうだい関係に関する研究. 看護研究, 30 (4): 47-56, 1997.
- 3) 戈木クレイグヒル滋子: 環境変化への適応～小児がんの同胞をもつきょうだいの体験～. 日本保健医療行動科学会年報, 17: 161-179, 2002.
- 4) 末永香: 小児がん患児の発病・療養が同胞に及ぼす影響と看護ケア. 小児看護, 25 (4): 472-477, 2002.
- 5) 長友久苗, 中村美保子, 夏伐憲子: 小児がん患児のきょうだいへの看護介入の検討—絵本を用いた関わりを通して—. 日本看護学会論文集小児看護, 41: 72-75, 2011.
- 6) 小澤美和, 泉真由子, 森本克, 他: 小児がん患児のきょうだいにおける心理的問題の検討. 日本小児科学会雑誌, 111 (7): 847-854, 2007.
- 7) 森美智子: 小児がん患児の親の状況危機と援助に関する研究(その1)—闘病生活により発生する状況危機要因. 小児がん看護, 2: 11-26, 2007.
- 8) 橋本美亜, 藤田あけみ: 小児がん患児のきょうだいへの母親のかかわり—きょうだいと母親の思いとの関連—. 保健科学研究, 8 (2): 35-44, 2018.
- 9) 安梅勅江: ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法—科学根拠に基づく質的研究法の展開—. 第5版. pp. 8, 医歯薬出版株式会社, 東京, 2009.
- 10) 峠雄士, 古谷嘉一郎, 塚脇涼太: 社会的比較状況と課題の質が同調行動に与える影響. 心理相談センター年報, 9: 55-59, 2013.
- 11) 谷津裕子: Start Up 質的看護研究. 第2版. pp. 144-154, Gakken, 東京, 2016.
- 12) 梅田英子, 藤村まゆみ, 平林高子, 他: 小児がんの子どもを持つ父親と母親のソーシャルサポート. 小児看護, 36: 98-100, 2005.
- 13) 西隈良子: 共感的喜びと妬み. 教育方法の探究, 7: 56-64, 2004.
- 14) S・ヴォーン, J・S・シューム, J・シナグブ/井上理 (監訳), 田部井潤, 柴原宣幸 (訳): グループインタビューの技法. pp. 2, 慶応義塾大学出版会, 東京, 2016

【Report】

Mothers' interaction with siblings of children with cancer: —Mother's intervention using group interview—

MIA HASHIMOTO*¹ AKEMI FUJITA*¹

(Received March 19, 2019 ; Accepted April 26, 2019)

Abstract: Aim: It is to verify whether provision of a place to share the mind of the mother of a child with cancer and nursing intervention in the place can be effective nursing support.

Methods: Among mothers who have a child with cancer requiring long-term hospitalization, we conducted a group interview where one of our researchers was a facilitator for five mothers who had other children living at home or at another location. We also conducted individual interviews 1 month later and qualitatively and inductively analyzed the obtained data.

Results: The group interview led to the identification of the following six categories for mothers' involvement with their other children: "adjusting the home environment," "adjusting the roles of the mother and father," "asking people besides family members for help with the other children," "checking in on the other children," "finding time to spend with the other children," and "making the other children endure separation and not being involved enough as a parent." Three actions that the participants hoped to implement in the future include: "taking turns with the father," "initiating contact with the other children once a day," and "explaining to other people to gain their understanding." Furthermore, the individual interviews conducted after implementing these actions revealed the positive responses of the families. For example, the other children expressed their feelings, and both parents managed to change their routine.

Conclusion: The results of this study suggest that providing opportunities for mothers to share their feelings and introducing nurses' interventions as facilitators provide effective nursing support for mothers and their other healthy children.

Keywords: child with cancer, sibling, mother